片　山　遺　跡

－南部高校クライミングウォール新築工事に伴う発掘調査報告書－

２０１３年３月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

例　　言

1．本書は、和歌山県日高郡みなべ町芝に所在する片山遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、クライミングウォール建設に伴うもので、平成 24 年度に発掘調査を実施し、同年度に報告書作成に伴う遺物整理業務を実施した。
3．発掘調査及び遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4．発掘調査・整理業務の調査組織は下記の通りである。

事務局長　　渋谷高秀（管理課長兼務）　　埋蔵文化財課長　　村田　弘
発掘調査業務担当　井石好裕　　遺物整理業務担当　川崎雅史

5．本書掲載の遺構写真は調査担当者が、本書の執筆・編集は川崎がおこなった。
6．発掘調査及び遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

凡　　例

1．調査ならびに本書で使用した座標値は、直角平面座標系（世界測地系）第Ⅵ系のもので、値はｍ単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P. +）の数値である。
2．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。
3．調査で使用した調査コード 12 － 33・032（2012 年度 - みなべ町・遺跡番号）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例
Ⅰ．経緯と経過 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 1
Ⅲ．既往の調査 …… 2
Ⅳ．調査の成果 …… 2
　１．基本層序と遺構面 …… 2
　２．遺構 …… 2
　３．遺物 …… 4
Ⅴ．まとめ …… 4

図目次

第１図　周辺の遺構 …… 1
第２図　既往の調査 …… 2
第３図　遺構 …… 1
第４図　遺物実測図 …… 4
第５図　片山遺跡既往の検出遺構 …… 5
第６図　突帯文土器の土器棺墓 (A 地点) …… 5

表１　片山遺跡既往の調査 …… 2

図目次

図版１　１．遺跡遠景（南西上空から）
　　２．遺跡遠景（南上空から）
　　３．遺跡近景（北東から）
図版２　１．調査前の現状（北西から）
　　２．調査区全景（西から）
　　３．調査区全景（北から）
図版３　１．遺構検出状況（北東から）
　　２．南壁断面（北から）
　　３．北壁断面（南から）

Ⅰ．経緯と経過

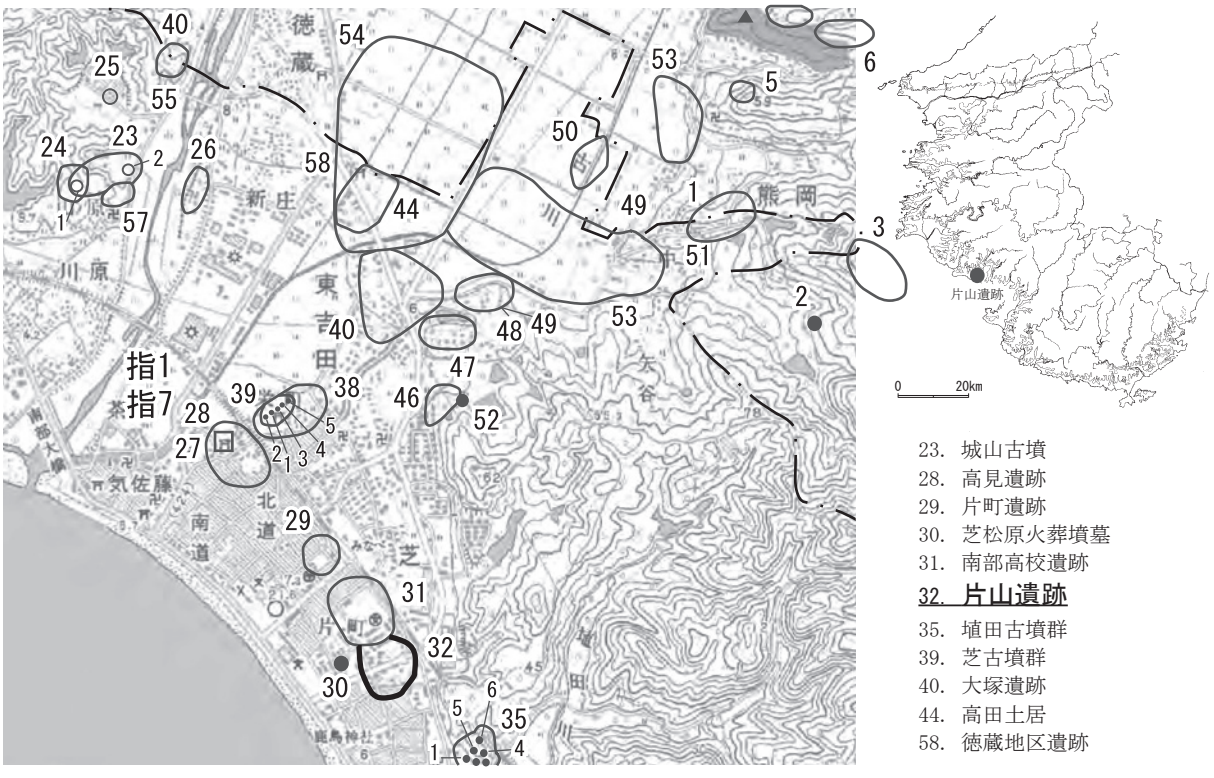
2015 年に開催される「紀の国わかやま国体」の山岳競技がみなべ町で行われるのに伴い、県立南部高等学校の敷地内にクライミングウォールが建設されることになった。予定地は、弥生時代から古墳時代の墓地として周知されている片山遺跡の範囲内であることから、建設に先立って発掘調査が行われることになった。

調査面積は、126㎡で、平成 24 年 11 月 19 日から 12 月３日まで現地調査をおこない、報告書作成に伴う整理業務は平成 25 年３月に実施し、報告書を刊行した。

Ⅱ．位置と環境

片山遺跡が所在するみなべ町は和歌山県の中央部、虎が峯に源を発する南部川流域に位置する。南部川の下流域には、平野部が少ない和歌山県の中・南部地域にあっては、比較的まとまった沖積平野が広がっており、この平野を基盤に原始・古代からの多くの遺跡が遺されている。平野部に面する丘陵上からは、過去に６個の銅鐸が出土し、弥生時代の高地性集落も多く存在する地域として著名である。河口近くの微高地に位置する徳蔵地区遺跡や大塚遺跡では、発掘調査で縄文時代中期以降古墳時代にかけての集落が営まれ、みなべ地域の中枢であったことが明らかになっている。また、重複するように位置する高田土居は巨大な方形居館で、中世後半期には守護所としての機能をもち、紀伊国南部地域の政治的拠点ともなっていた。

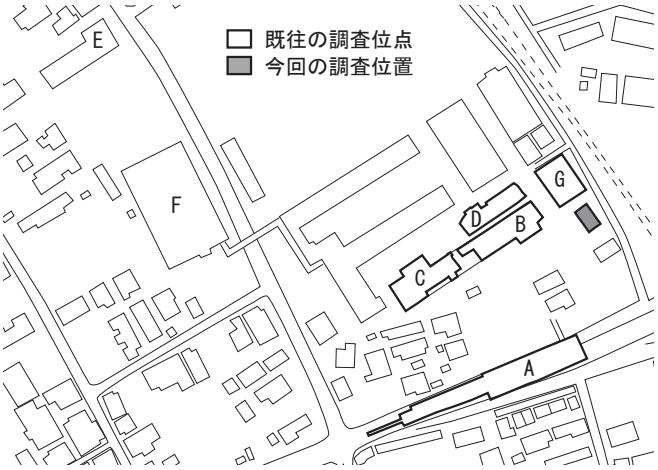
片山遺跡は、南部川河口左岸に形成された海岸砂丘上に位置する。南部湾に沿うように弧状を呈して約 1.6㎞のびる砂丘は、大きくは２時期にわたって形成されたことが現地形から読み取ることができる。そのうち、古い時期に形成された砂丘稜線付近は、弥生時代から古墳時代にかけて墓地として利用され、高見遺跡・片町遺跡・南部高校遺跡・片山遺跡が北西から南東に繋がっている。



第１図　周辺の遺跡

Ⅲ.既往の調査（第２図）

片山遺跡は南部高校遺跡と一連の遺跡で、南部高校の敷地を中心に展開している。町道建設や校舎の改築などに伴って、これまでにＡ～Ｇ地点の７度にわたり発掘調査が実施され、Ａ～Ｄ・Ｇ地点で弥生時代から古墳時代の土壙墓や方形周溝墓などが見つかっている。既往の調査は表１のとおりである。



第２図　既往の調査

表1　片山遺跡の既往の調査

地点名	年度	調査原因	調査主体	報告書
A地点	昭和52年	町都市計画道路	町教委	『片山遺跡A地点発掘調査概報』 1978．３　南部町教育委員会・片山遺跡調査委員会
B地点	昭和54年	校舎改築	県教委	『片山遺跡B地点発掘調査概報』 1979．３　和歌山県教育委員会・(社)和歌山県文化財研究会
C地点	昭和55年	校舎改築	県教委	『片山遺跡C・D地点発掘調査概報』 1981．３　和歌山県教育委員会・(社)和歌山県文化財研究会
D地点	昭和55年	合併処理場	県教委	『片山遺跡C・D地点発掘調査概報』 1981．３　和歌山県教育委員会・(社)和歌山県文化財研究会
E地点	昭和56年	寄宿舎改築	県教委	
F地点	昭和57年	体育館新築	県教委	
G地点	昭和58年	生徒集会室新築	県教委	『片山遺跡G地点発掘調査概報』 1983．８　和歌山県教育委員会

町教委：南部町教育委員会　県教委：和歌山県教育委員会

Ⅳ.調査の成果

１．基本層序と遺構面

調査前には自転車置き場で、それ以前にも校舎が建っていたこともあって、攪乱が深くまで及んでいる。第Ⅰ層は調査前に敷かれた砕石、第Ⅱ層は分層できるが近代以降の攪乱層あるいは整地土で、地表下約 80㎝で第Ⅲ層・地山となり、すべての遺構を第Ⅲ層上面で検出している。第Ⅲ層は箇所により異なるが、基本的に土分が少ない、あるいは土分を含まない砂層・礫層である。

２．遺構

検出した遺構には、土坑（遺構４・５・８～ 11）がある。円形または不整楕円形を呈し、埋土は、遺構４・５・９～ 11 が 5Y5/3 黄褐色粗砂で、遺構８は 2.5Y5/1 黄灰色細砂である。

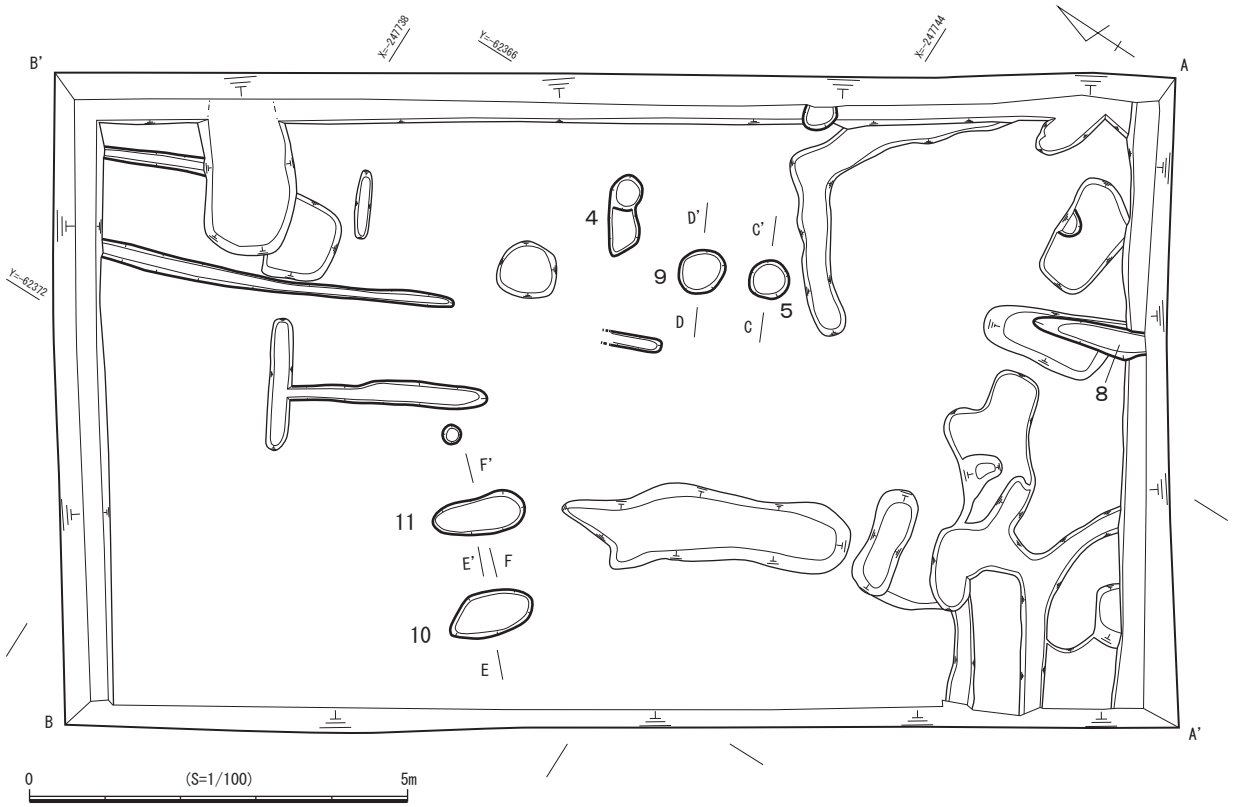
遺構４　不整楕円形を呈する土坑で、規模は長さ 1.1 ｍ、幅 0.4 ｍ、深さ 0.1 ｍを測り、東側は 0.1 ｍ深くなっている。遺物は弥生土器の細片が出土している。

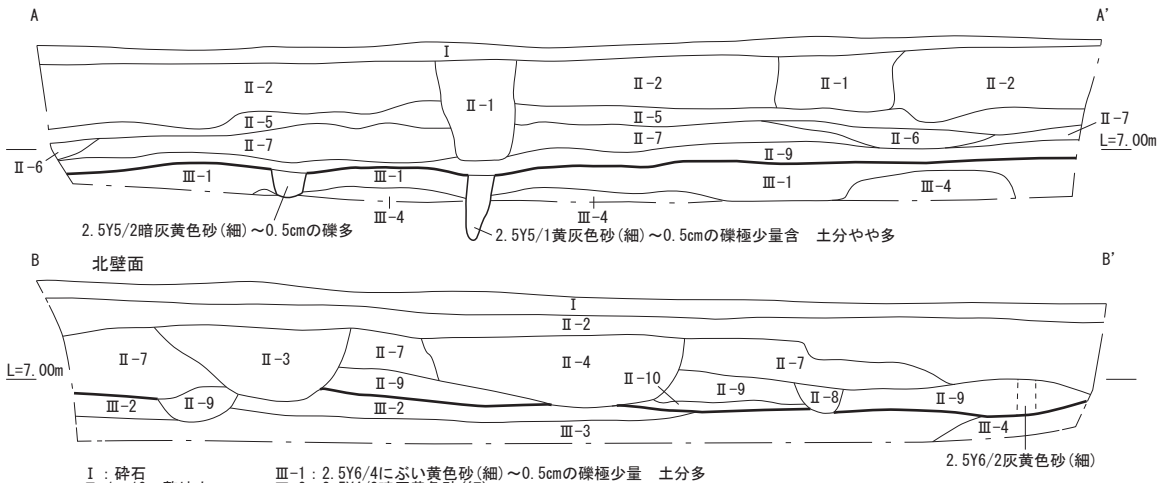
遺構５（第３図）　遺構９と南北に並列する。円形を呈する土坑で、規模は 0.53 ｍ× 0.48 ｍで、深さは 0.1 ｍを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

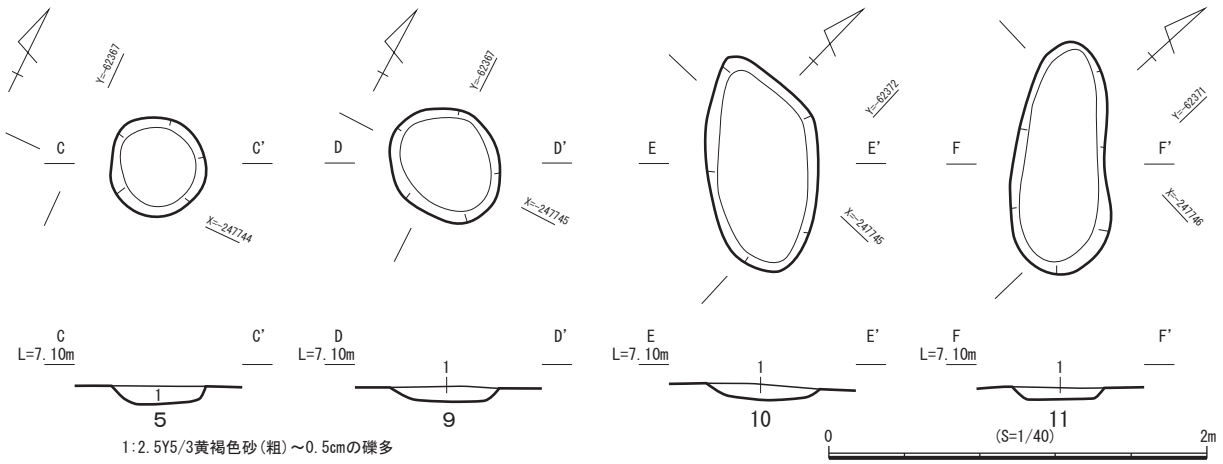
遺構８　調査区の南端で検出した土坑で、南側は調査区域外となり全容は不明である。形状は長整楕円形を呈し、規模は長さ 1.5 ｍ以上、幅 0.4 ｍ、深さ 0.58 ｍを測る。遺物は弥生土器の細片が出土している。

遺構９（第３図）　遺構５の北側に位置する。円形を呈する土坑で、規模は 0.63 ｍ× 0.56 ｍで、深さは 0.1 ｍを測る。遺物は弥生土器の細片が出土している。

遺**構10**（第３図）　遺構 11 と東西に並列する。不整楕円形を呈し、規模は長さ 1.14 ｍ、幅 0.61


B'
A
X=-247738
Y=-62366
X=-247744
Y=-62372
4
D'
C'
9
5
D
C
8
F'
11
E'
F
10
E
B
A'
0
(S=1/100)
5m


A
A'
Ⅰ
Ⅱ-2
Ⅱ-1
Ⅱ-5
Ⅱ-7
Ⅱ-6
Ⅱ-9
Ⅲ-1
Ⅲ-4
Ⅱ-7
L=7.00m
2.5Y5/2暗灰黄色砂(細)～0.5cmの礫多
2.5Y5/1黄灰色砂(細)～0.5cmの礫極少量含　土分やや多
B
北壁面
B'
Ⅱ-3
Ⅱ-4
Ⅱ-10
Ⅱ-8
Ⅲ-2
Ⅲ-3
2.5Y6/2灰黄色砂(細)
Ⅰ：砕石
Ⅱ-1～10：整地土・カクラン
Ⅲ-1：2.5Y6/4にぶい黄色砂(細)～0.5cmの礫極少量　土分多
Ⅲ-2：2.5Y4/2暗灰黄色砂(細)
Ⅲ-3：5Y3/2オリーブ黒色砂(中～粗)
Ⅲ-4：2.5Y5/4黄褐色砂(中)
0
(S=1/60)
3m


C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
Y=-62367
Y=-62372
Y=-62371
X=-247744
X=-247745
X=-247746
L=7.10m
1
5
9
10
11
1:2.5Y5/3黄褐色砂(粗)～0.5cmの礫多
0
(S=1/40)
2m

第３図　遺構

m、深さ 0.1 mを測る。遺物は出土していない。

遺構 11（第３図） 遺構 10 の東側に位置する。形状は楕円形を呈し、長さ 1.15 m、幅 0.55 m、深さ 0.1 mを測る。遺物は出土していない。

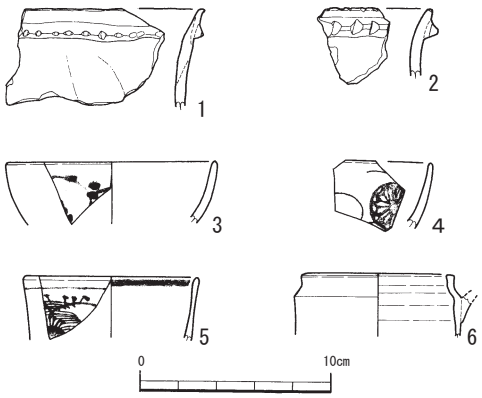
３．遺物（第４図、写真１）

遺構から出土した遺物は土器の細片で、実測できる遺物はない。平面精査時に出土した突帯文土器２点（１・２）や攪乱から出土した近世陶磁器（３～６）を図示することができた。

１は外傾する口縁部の端部より下がった位置に断面三角形の突帯を付す。突帯上にはＯ字状の押圧が弱いキザミを施す。端部はやや尖り気味である。胎土には１～５㎜大の砂岩・頁岩・長石粒を多く含み、少量の結晶片岩も含まれる。

２はわずかに外反する口縁部の端部よりやや下がった位置に断面台形の突帯を付す。突帯上には大Ｄ字状、口縁端部には小Ｄ字状のキザミを施す。胎土には１～２㎜のチャートや長石などの砂粒が多く含まれる。

３～５は肥前系染付の碗である。外面の文様は３・５が草花文、４はこんにゃく印判による丸に菊花文である。６は京・信楽焼系の施釉陶器水注である。灰釉が外面から内面上部にかけて施され、口縁端部は露胎である。



第４図　遺物実測図

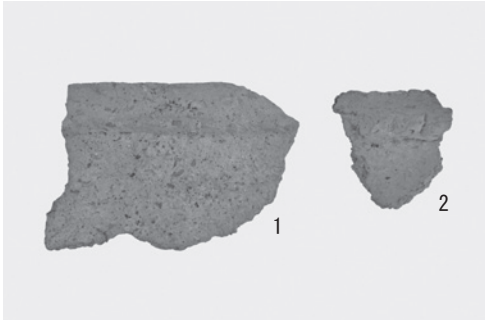


写真１　出土遺物（突帯文土器）

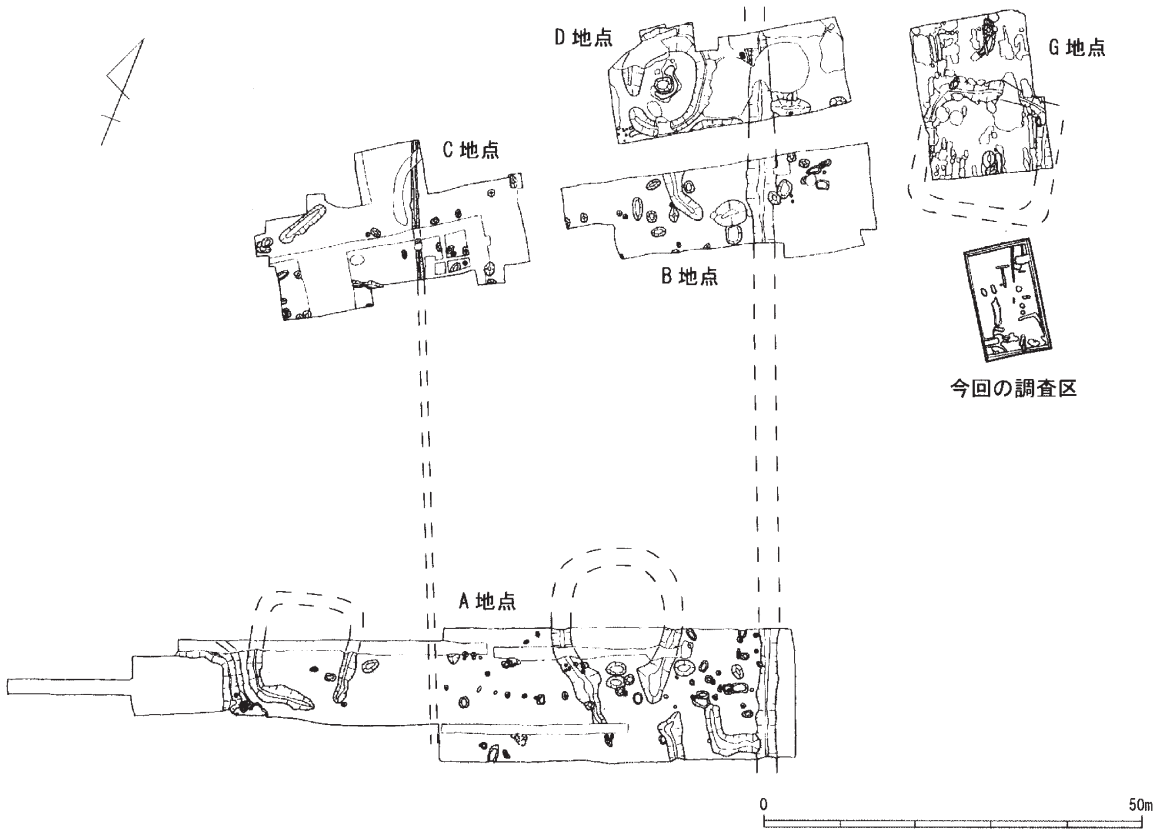
Ⅴ　まとめ

調査では土坑が検出され、遺物では遺構以外のものを含め突帯文土器・弥生土器・土師器・近世陶磁器などが出土した。土坑は規模が 0.5 mから１m余りで、深さも 0.1 mと小規模なもので、弥生土器や土師器の破片が出土しているものの、埋土から中世以降に帰属する可能性がある。ただ、出土した弥生土器・突帯文土器については、原位置を離れているものの、既往の調査事例からも土壙墓に供献されていたものであった可能性が高い。

１・２の突帯文土器は、前期の弥生土器に共伴し和歌山県南部地域に広く分布する瀬戸タイプではない。１は結晶片岩を含むことから搬入品であり、形態は徳島県で弥生土器が出現する前後の名東遺跡や三谷遺跡などの突帯文土器と類似する。２は口縁部が外反することでは東部瀬戸内をはじめ和歌山県南部の突帯文土器の特徴をもつが、突帯の形状は在地には無い属性であり搬入品の可能性も考えられる。

今回の成果も踏まえ、片山遺跡についてまとめておきたい。

昭和 52 年、町道建設に伴い南部高校の東側で発掘調査（A 地点）が実施され、弥生時代の土坑や古墳時代の方形周溝墓が確認され、多くの土器が出土した。弥生時代の土坑から出土する土

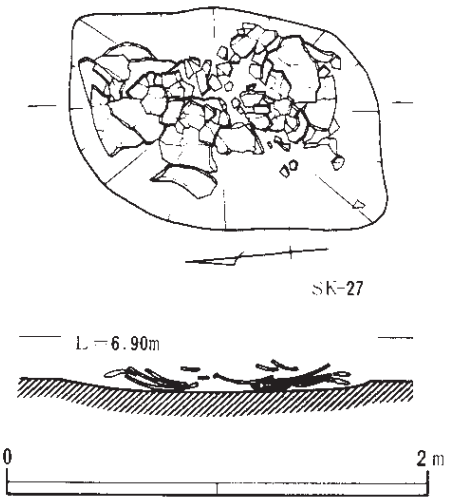


第５図　片山遺跡既住の検出遺構

器は完形品が多く、一様に底部近くに焼成後に穿孔を施していた。石器などが出土しないことから集落に伴うものでなく、出土状況からこれらの土坑が墓であること明らかになった。その後、南部高校の校内で発掘調査が６次（B ～ G 地点）にわたって行なわれ、B ～ D、G の４地点で弥生時代から古墳時代にかけての遺構が検出された。これにより、片山遺跡は一時間断期があるものの弥生時代から古墳時代にかけて長期に継続する墓域であることがわかった。

弥生時代から古墳時代の墓は推定約 30000㎡の範囲に展開していることが予想されるが、調査した面積は約 3000㎡と 1/10 程度であり、明確なことは言えないものの、既往の発掘成果から時期によって墓域が違っていることが窺える。

弥生時代前期の墓は A 地点で、土坑２基が検出されている。うち１基は縄文時代晩期末の突帯文土器・瀬戸タイプの深鉢２個体を土器棺として利用したもので、近くから出土する弥生土器壺から前期中段階から新段階に併行するものと理解される。また、周辺からは突帯文土器が後世の遺構などに混入して出土していることから、これらの土坑以外にも存在し、墓域を形成していたと考えることが出来る。また、A 地点から約 50 m離れた今回の調査でも弥生時代に帰属すると考えられる突帯文土器が出土し、B ～ D・G 地点では前期の遺物が出土していないことから、当期の墓域の北限を



第６図　突帯文土器の土器棺墓（A 地点）

示唆するものとなった。

中期前葉から中期中葉の墓は、A 地点にはなく南部高校校庭のB・D 地点の東からG 地点に展開しており、土器棺や土器を供献する土坑墓などが検出されている。

中期後葉の前半は片山遺跡で最も墓域が広く展開する時期で、巾約 44 mの間隔をあけて南北に走る２本の溝が区画しており、延長は 90m 以上を測り広大なものとなる。供献土器を底付近や上部に複数置く土壙墓、中央に土器を配置する土壙墓などがあり、A 地点ではL 字型に折れる溝を検出しているが、東側を区切る溝との組み合わせで方形周溝墓になる可能性もある。また、焼土や炭を伴う炉状の土坑も検出しており、祭祀に伴うものである可能性も想定できる。

ところで、中期の供献土器には甕はなく、壺が主となるが、中期後葉では高杯のほか脚台をもつ壺・鉢、把手を付す壺・鉢など特殊な土器が目立ち、これらの土器にも穿孔されている。

中期後葉末から後期の墓および遺物は見つかっていない。この時期の集落は平野部を離れて丘陵や山上に立地する時期でもあり、集落の動態に連動したものと考えられる。この現象は、日高川河口右岸に形成された砂丘上に立地する吉原遺跡でも窺うことができる。

その後、墓が作られるのは庄内式期ら布留式期初頭になってからで、D・G 地点でそれぞれ１基の方形周溝墓が検出されている。D 地点の方形周溝墓はマウンド部が南北 9.5m、東西 7.2m で、西辺に陸橋部をもつ。主体部は土坑で中央に築かれており、土坑の肩口の３方にC の字型に粘土を巡らした特異な構造をもっている。遺物は主体部から出土していないが、周溝の北西隅と南西隅に土器が集中しており、南東隅からも底部に穿孔をもつ完形の壺が出土している。また南辺からは勾玉１個、管玉７個が出土している。G 地点の方形周溝墓はマウンド部が南北 10.2m 以上、東西 13.4m で、陸橋部の存在は明らかでない。主体部は中央部で土坑が１基確認されているだけである。遺物は主体部から出土していないが、周溝部から土器や鉄鏃が出土している。

布留式期になるとA 地点で周溝墓が造られる。陸橋部で溝を外方に突出させることで前方後円形にしたもので、後円部の径約 12.5m で突出部は長さ 4.2m、巾 7.6 mを測る。主体部は確認されていない。遺物は周溝部から土器や鉄鏃が出土している。

弥生時代から古墳時代前期までの土壙墓や方形周溝墓は、砂丘の稜線より後背側に立地するが、古墳時代中期以降は、稜線より海側にも展開するようになる。A 地点で方形周溝墓１基、溝状遺構、土坑、B・C 地点で溝状遺構が検出されている。方形周溝墓は墳丘部が南北 8.0m 以上、東西 10.5m で、周溝の南東部分を掘り残して陸橋部としている。主体部は確認されていない。遺物は周溝部から初期須恵器の大甕・甕などが出土している。このほか、A 地点で６世紀代の須恵器が出土しているのをはじめ、南部高校の校庭においても古墳らしきものが検出されている。

片山遺跡は、弥生時代に集団墓としての性格をもつが、弥生時代後期の間断期以後は有力層の墓域となる。方形周溝墓は、弥生時代の家族墓として成立するが、片山遺跡のものは、主体部が中央に１つで、また前方後円形を呈するものがあるなど、土壙墓などとは一線を画するものである。古墳時代中期に至っても方形周溝墓が築かれるが、この頃には高塚を築く城山古墳も造られ、被葬者の性格に違いがあったことが想像できる。

図版 1

1. 遺跡遠景
（南西上空から）

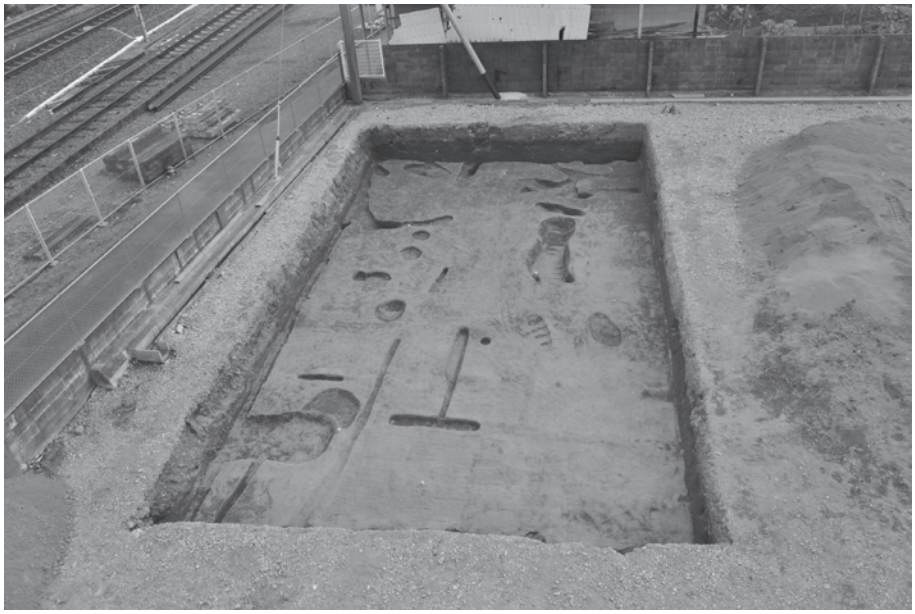
2. 遺跡遠景
（南上空から）

3. 遺跡近景
（北東から）

図版２

1. 調査前の現状
（北西から）

2. 調査区全景
（西から）



3. 調査区全景
（北から）

1. 遺構検出状況
（北西から）

2. 南壁断面
（北から）

3. 北壁断面
（南から）

報告書抄録

ふりがな	かたやまいせき
書　名	片 山 遺 跡
副書名	南部高校クライミングウォール新築工事に伴う発掘調査報告書
編著者名	
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒 640 － 8404　和歌山県和歌山市湊 571 － 1　　TEL　073-433-3843
発行年月日	西暦 2013 年 3 月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村名	遺跡番号					
片山遺跡（かたやまいせき）	和歌山県（わかやまけん）日高郡（ひだかぐん）みなべ町（みなべちょう）芝（しば）	30391	32	33° 45′ 53″	135° 19′ 36″	20121119 ～ 20121203	126㎡	クライミングウォール新築

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
片山遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代	土坑	突帯文土器 弥生土器 土師器 近世陶磁器	なし

要約	クライミングウォール新築工事に伴い面積 126㎡を対象に発掘調査を実施し、土師器や弥生土器の破片を含む土坑を検出した。また、遺構精査時には突帯文土器も出土している。土坑は埋土から中世以降のものと考えられるが、弥生土器や突帯文土器は周辺部の調査事例からも、土壙墓の供献土器であった可能性がある。

片山遺跡

― 南部高校クライミングウォール新築工事に伴う発掘調査報告書 ―

2013 年 3 月

編集・発行　公益財団法人 和歌山県文化財センター
印刷・製本　株式会社　協　和